本と東大。

東大は誕生以来、
常に「本」とともに歩んできた。
本がある。
そして、学ぶ者がいる。
この両者の関係こそが本学の
「知」の原動力なのだ。
書物の国・東京大学にようこそ。
めくるめく知の大迷宮の扉が、
今、開かれる。

西郷和彦
東京大学附属図書館長

渡邊あゆみ
NHKチーフ・アナウンサー

樺山紘一
印刷博物館館長

［特別座談会］

本と図書館と大学を語る

大学に生きる人々は教職員も学生も、
それぞれが「本」との密接なつながりを持っている。
そこで今回は、樺山紘一印刷博物館館長、
渡邊あゆみNHKチーフ・アナウンサー、西郷和彦本学附属図書館長に
「本と図書館と大学」に関して語っていただいた。
まさに「知」の本質が表れている談話といえよう。

東大の図書館の構造

東大の図書館
（東京大学附属図書館）

- **総合図書館**（本郷）
- **駒場図書館**
- **柏図書館**
- **各部局（学部・研究所等）の図書館（室）**

東京大学附属図書館HP
http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/

渡邊　今日は特集のテーマである「本と東大」について、図書館のことなどを中心にいろいろお話しいただきたいと思います。大学図書館のあり方は、新しい時代の大学のあり方と関係してくると思われますね。そもそも「大学」という制度が始まったのはいつ頃なのでしょうか？

樺山　大学は、元々、ヨーロッパ中世に始まった教育施設です。パリ大学、オックスフォード大学、イタリアのボローニャ大学といったヨーロッパの大学は12世紀、13世紀に相次いで出来ました。それらの大学は、形は変わったし、サイズも大きくなったけれども、今でもほとんどそのまま残っています。それ以前の学問の府は、やはり修道院ですね。ヨーロッパ中世という時代はキリスト教の支配下にあったわけですが、当時の書物はごくわずかな人、特にキリスト教の聖職者が読んでいました。それらの書物は、ほとんど修道院で作られ、読まれていました。

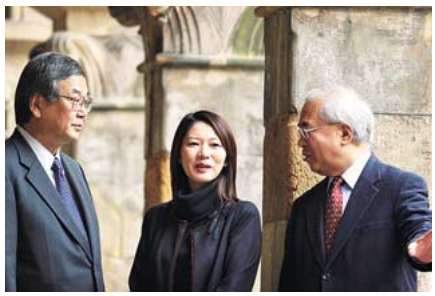
渡邊　もちろん手書きですね？

樺山　そうですね。印刷術は15世紀半ばに登場しますが、それまでは全部手書きで原本から写本を作っていました。写本を作ることが修道院の大きな役割だったんです。とても大変な仕事でした。旧約聖書・新約聖書両方あわせて、キリスト教の聖書１組を書き上げるのにベテランの「写字生（書写する人）」ひとりの力で約１年かかったんです。すべてラテン語で。もちろん作ること自体も修行です。写経のようなものですね。その後、大学ができると、先生や学生がいて修道院より人間が増えますから、教育研究用の書物が必要となる。エキスパートの写字生を雇って、大学の中で作り始めるわけです。そうなって、初めて「大衆化」とまでは言えませんが、修道院時代よりはるかに数多い写本が流通するようになったんですね。でも、高い。聖書１冊が１年かかるわけだからとても高価でした。

渡邊　図書館といいますと、大量の本がおさめられている印象がありますが、当時の図書館というのは？

樺山　東大の図書館みたいな大きな図書館があるわけではないし、本は高価で読む場所も限られているので、本当に小さいものでしたね。それでも、のちにソルボンヌと呼ばれるようになったパリ大学には中世末の15世紀では、何百冊も写本があったようです。でも、なにせ、大きな写本ですし、皆で読むわけだから借りていかれると困るわけです。

渡邊　そうすると、貸し出しはしていなかったんですか？



樺山　貸し出ししないどころか、多くの場合はチェーンがついていて、持ち出せないようになっていたんですよ。本は修道院または大学の図書室に行って読むものだったんですね。１冊の本を読むために、多分、行列を作って順番待ちをしていたんだと思います。

渡邊　大学の図書は、その起源を思えば大変重みのあるものだということですね。

樺山　そうですね。その後、15世紀半ばにグーテンベルクによって活版印刷術が開発されて、本はずっと安くなったし、冊数も増えました。でも、そうなればなるほど、大学は書物を揃えなければならなくなります。「大学教授がいて本があるということ」が、大学のメリットでもあるし、シンボルでもあるわけですから。

書物はきっかけの宝庫

渡邊　西郷先生のご専門は化学ですね。理系の先生方にとって、「紙の本」はどんな価値を持っているんでしょうか？

西郷　例えば過去20年間の仕事がまとめられているような書物は私達にとって非常に大事なんですね。最近、そういう本も電子化されるようになってきました。学術雑誌の電子ジャーナル化が急速に進んでいますし、書物も電子ブック化が進んでいます。研究の上ではそれも良いと思うんですが、「教育の上では電子化された書物は良くない」というのが私の立場です。やはり、目を動かして紙をパラパラとめくりながら読んでいくことが大切です。そういう読み方をすると、自分が目的としないページでハッと目が止まる瞬間があります。

渡邊　あります、あります。辞書を引いていてもそうですね。

西郷　それが「教育」だと思うんです。「理系の本は電子化が進んでいるので、もう紙は要らないんじゃないか」などとよく言われますが、今だからこそ、「紙を大事にしたい」と思っています。私の研究室では十数種類の電子ジャーナルを学生に読ませていますが、同時に「紙の本」も買うようにしています。電子ジャーナル化された文献は「いくつかのキーワード」でしか探せないので。特定のキーワードで探していくと、教育上大切な文献が漏れることもあるわけですね。つまりそれは、研究上必要なキーワードなのであって、「教育上必要なキーワードはひとつに決まらない」と私は考えています。

樺山　研究調査にはいろいろな側面があります。「本をピンポイントで探す」ことは英語でlook for、looking forと言

いますが、それ以外にsearchという言葉がありますね。ある事柄を探すけれども、その周囲のところを見てみるとか、「何かおもしろいことがないかな」といって開けてみるとか。学問にはこの両面がある。looking forでもあるけれどもsearchする仕事でもあるんです。そのために、紙の本が大切なんですね。

渡邊　受験生は塾の先生から「電子辞書を買いなさい」と言われます。「英単語を調べるのに電子辞書なら１秒で済むんですよ。しかも、最初の数文字で引けます。何千語かの英単語を覚えるのに費やす膨大な時間の浪費を防げます」と言われて買ってしまうんです。だけど、私達、親としては、広辞苑や大辞林を引いた時に目当ての言葉の近くに偶然見つけるちょっと違う絵に「これ、なんだろう」と興味を持つことが大切だと思えるんですね。

樺山　探した言葉の隣の言葉とかね。

渡邊　ええ、そこに発見や喜びがあると思うんです。受験生達は電子辞書の小さな画面をスクロールしながら見ているので、そういう発見は少ないかもしれない。電子辞書世代の子達が東大に入学してきて、その中の優秀な学生は研究者になるだろうし、次世代を育てることも担っていくわけですね。そう考えると、先生方が学生に書物の重要性を説いていくことは大切ですし、とても大変なことですね。

西郷　先ほど樺山先生がおっしゃった「昔は本を作るためにとてもお金を使っていた」ということを、私達現代人はもっと考えなくてはいけませんね。学習、教育とは「いかに無駄を認めるか」ということ。あえて言うならば、「昔の大学は無駄を求めて１冊何百万円もする本を揃えてきたのだ」と思うんです。便利になったから、安くできるから、と効率だけを求めるのはこれからの日本にとって良くないと思います。そういう意味で図書館の使命はもっともっと強くならなければと思っているんですよ。

渡邊　南方熊楠を番組で扱ったことがあるんですが、彼は大英博物館図書室に毎日通って、自分で本を写しているんですね。それを知って、私、ずっと疑問に思っていたんです。若き日の大英図書館通いの日々……現代なら「コピーすればいいのに」とか「ネットで見ればいいのに」と思えるような膨大な時間を最初から研究に充てていたら、熊楠はもっとすごい研究ができたのかしら、と。「手書きで覚える」という作業の価値を、先生方はどのように考えていらっしゃいますか？

学生に書物の重要性を説いていくことは大切ですし、とても大変なことですね。

西郷　昔の私は、先ほど申し上げた20年くらいの進歩が書かれている本や学術雑誌を読んで、自分で要約して、要点をノートに書き込んでいました。すると、１ページの要約が３行くらいになります。つまり、１ページを理解していないと３行書けないわけですね。それをためておいて、後で見返して、「あのことはこうだったな。じゃ、こういうこともできるかもしれない」と考えるわけです。一度、読んでいることによって、もう頭が動いているんですね。ところが、現在の学生達はコピーして机の上に積んでおく。我々、よく、学生に言いますよ。「君は積んでおくのがうまいな」(笑)。

樺山　それから、今の学生の中には、「レポートを書け」というと、こっちの文献の３行と向こうの文献の３行をくっつけるという作業でレポートを作ってくる人がいます。だから、前半は「である」調で、後半は「です・ます」調という代物が上がってきたりする（笑)。語尾なんて、気にしていないわけです。差し当たり、レポートはできるけれども、自分の手で覚えていないものだから、自分の身についていないんですね。

東大学内の書籍の「ありか」は?

樺山　東大全体の蔵書は、現在、800万冊くらいですか？

西郷　850万冊ですね。

樺山　この850万冊がすべて総合図書館にあるわけではない。ほとんどの本が、各学部・研究所など色々な所に分属しているわけですね。例えば、私は文学部出身ですが、文学部図書室に行けば文学部の蔵書が全部あるかというと、違う。文学部には30以上の研究室があるのですが、それぞれに分かれて所蔵されています。

渡邊　研究室ごとにライブラリーが

あるとイメージすればよろしいですか？

樺山　そういうことなんです。工学部は今、いくつですか？

西郷　16の専攻ごとの図書室がこの春、工学・情報理工学図書館として、ひとつの組織になりました。場所は専攻の建物に分散配置されています。

樺山　研究室・教室にはそれぞれの慣行がありますので、本の並べ方、分類の仕方を自分達のやり方でやっています。それらは全部東大の本ですから、理屈からいえば､調べたい時にそこへ行って｢東大の本を見せてください｣と言えば見られるはずなんです。しかし、実際にはバリアが高いので、飛び込んで行っても普通は見せてくれませんでしたね。最近は大分変わりましたが、古くからの研究者の意識としては、東大の図書館に登録された本ではあるけれど自分で抱えていたいんですよ、やはり。

渡邊　また、東大の場合には「寄贈された本」が多いですね。そういう寄贈本はどう管理していらっしゃいますか？

西郷　たしかに、寄贈本が大変多いのが本学の特徴だと思います。退職された先生方の所蔵本が、どっと来たりしますね。これにはちょっと問題がありまして……かなりの部分がすでに所蔵されている本と重複しているんです。しかし、いただくのはとても嬉しいことです。寄贈してくださる方のお気持ちを考えると「要らない」とは言えません。捨てるなんてとんでもないことですね。その結果、図書館で長く保存すべき一群の所蔵本がある以外に、寄贈された本がゴソッとあるという状況になりつつあります。

樺山　寄贈はありがたいのですが、それを収納する場所の問題と整理するための人件費の問題が出てきますね。それから、○○先生からいただいた本は「○○文庫」と名づけて少し格がある形で保存したい。そうすると、他の所蔵本と違って「○○文庫」の本は分類の対象にならなくなってしまう。検索が難しくなるわけです。

渡邊　「○○文庫」でまた別に分類リストを作っていくのでは、大変非効率になってしまいますね。

西郷　私どもの今のアイデアでは、「○○文庫」というのはバーチャルにして、全体の分類に従って配架しようと考えています。そうしないと、10年後には大混乱になると思いますから。

渡邊　それらを一時的に収蔵するための書庫のスペースは足りているんですか？

西郷　うーん……本学では、2005年の１年間にほぼ20万冊の本が増えています。増加分の書架が6,000メートルも必要なんですよ。具体的には、文系の先生の研究室は小さな机と通路以外、すべてのスペースに本が積んであって、傷まずに保存できる場所に置きたい本も山積みにせざるをえない……そんな状態ですね。

理系と文系の本の違い

樺山　統計値があるわけではないんですが、日本の研究者、特に文系の研究者は個人的にも公にも、本をたくさん持つ傾向がありますね。遡れば奈良時代以来、本との付き合いが非常に密接だったということがありますでしょう。書物の量も多いし、本を自分の手元に置いて勉強するという習慣ができていますので、文系の研究者達は自分の図書館を建てているようなものです。自分の家は本だらけ。ときどき根太が抜けたりしてね。そんなに自分ひとりの図書室を作らなくていいじゃないかと言われるんですが、総論はそのとおりです。でも、やはり、ふだん使う本や新しく出た本は手元に置きたいという気持ちがあります。結果として、家の中は本だらけになっている、と。

渡邊　先ほど西郷先生は「書物は重要である」とおっしゃいましたが、理系の先生方の傾向としてはいかがですか？

西郷　理系の分野では、大体10年で教育、研究に使う本の寿命がなくなるんです。

渡邊　先端の研究ですものね。

西郷　理系の先生方は10年から15年経つと、ビニール紐で縛って整理してしまいます。かなりのペースで回転しますので、私の部屋に仕事の本は300冊くらいしかありません。300冊というと、高校生の蔵書くらいかな（笑）。仕事上の本は。

渡邊　それは理系の本の宿命ですね。

樺山　今では、理系の先生方も「古い本を捨てろ」とおっしゃいませんが、長い間、そのことを理解していただくためには苦労しました。「明治時代の本なんて、なぜ、要るのか」と言われるんですが、明治時代だろうが、江戸時代だろうが、その本が持っている意味がいつ表

に出るか分からないですからね。

西郷　科学史をやっている私の友人は、研究材料となる本がなかなか手に入らなくて苦労しています。大学図書館はそういう文献もちゃんと保存しておかないと、何十年か後に20世紀から21世紀の進歩を眺める人の研究材料がなくなってしまう。それから、先ほど申し上げたように、紙をさわりながら思考を巡らせる時間や、私達が直接知ることのできない200年、300年前の時代を頭に思い浮かべる時間は、とても重要な時間だと思うんです。

樺山　「書物のアナログ性」というのは、人間の知的な仕事にとって必要なんですね。「デジタル化して、元の本は廃棄してもいい」という意見もあるけれど印刷された本に実際に触れることの大切さもありますでしょう？　表紙がついている、装丁されている、アルファベットも漢字も平仮名もそれぞれ活字の字体が違う。そして、かつて読んだ人が付けたしみが残っている……これらすべてを合わせて「本」なんですね。

東大の図書館に息づく貴重書の数々

樺山　総合図書館は1923年（大正12年）の関東大震災で建物が燃え、蔵書もほとんど灰になってしまったそうです。そこから、再出発したわけですね。

渡邊　それもロックフェラーさんからのご寄附によってですね。

西郷　そうなんです。ロックフェラー財団から当時で400万円、今でいうと400億円くらいだと思いますが、寄附をいただいたんですね。

樺山　そのご寄附で現在の総合図書館の建物が建てられ、蔵書のほうは世界中から寄贈いただきました。今でも書物の表紙裏に、大震災の被害を受けた東大図書館に○○が寄贈したものであるという判子が見えることがあります。

西郷　各方面から多数の寄贈をいただいていますが、その中には貴重な本が多々あります。たとえば、総合図書館には「森鷗外の書き込み本」があるんですよ。

渡邊　鷗外本人の書き込みがある本？

西郷　はい。鷗外文庫は1万8,000冊ですが、その中に、鷗外の「鉛筆による細かい書き込み」がある本があるんです。請求すれば誰でも見られますから、過去には、学生が「いたずら書きだ」と思って書き込みを消してしまったという「事件」もありました（笑）。

渡邊　えー！　罰当たりですね（笑）。

西郷　この鷗外書き込み本なども電子化すれば良いというタイプの本ではありませんね。実際、実物を手に取ってみると、手が震えるというか。

渡邊　でしょうね。あの鷗外が自ら鉛筆で、しかも筆跡も生々しく、ですものね。

樺山　寄贈・購入の如何にかかわらず、「東大の図書館以外にはすでにない貴重本」がいくつもありますよ。よく話題になるんですが、江戸時代の思想家、安藤昌益の『自然真営道』という本は原稿も刊本もほとんど残っていないんです。残っている刊本が現在3組。この刊本ではなく原稿のほう、つまり、稿本は12巻分、総合図書館にあります。これにはドラマがありまして……1923年（大正12年）に東大の図書館が稿本全揃い101巻91冊を買ったんです。すると、その年に大震災があって、燃えてしまった。全部

燃えたはずだったんですが、実は12巻分だけ東大の三上参次先生という方が借り出していて、お宅にあった。だから、その12巻だけが残ったんですね。今でも総合図書館に収蔵されています。40年近く前、学生時代の私はこの稿本の実物を読んだことがあります。大学院の授業で「安藤昌益を読もう」ということになって、総合図書館に読みに行きました。貴重書庫から出してもらって稿本の実物を手に取った瞬間……緊張感で手が震えましたよ。「これがあの震災で焼け残った本なんだな」と思ってね。安藤昌益の場合は活字で起こした近代印刷本が出ているので「それを読めばいい」とも言えますが、やはり、稿本に価値がある。1行の中に大きい字があったり小さい字があったり消してあったり。筆者の思考過程を探るには原本でしかやりようがないんです。写真に撮ったものを見ても、やはり、だめです。原物でないとね。

渡邊　筆圧などに心理が投影されているわけですね。パソコン全盛時代となったからこそ、「肉筆」が大事なんですね。

樺山　そういうことも、やはり、図書館の使命だと思います。

書物の管理・保存の難しさ

西郷　ご存知のように、東大の図書館では図書を整理するのにカードを書いていたんですが、現在ではコンピュータ入力によって登録しています。すでに所蔵されている本の登録を「遡及入力」と言いますが、本学では、まだ、古いほうの100万冊強が未入力なんですね。100万冊を入力するのに、多分、10人がかりで10年くらいかかって、年間何千万とお金がかかるんです。

渡邊　それらはどういった形で東大に集まってきたものなんですか？

西郷　先ほど申し上げた関東大震災の後に、色々なところから急激にご寄附いただいたものです。今なら、受け入れた時に入力していますが、古いほうの入力が追いつかなくてそのまま書架に並んでいるんです。この間も、ある先生から「一般の書庫のところにこんな大事な本を置いて」とお叱りを受けたんですよ(笑)。

樺山　たしかに、本は「お宝」なので大事に扱わなければいけませんね。でも、「使ってこそ本」ですから。

渡邊　読んで、活かして。

樺山　簡便に本を手に取れるということを考えると、箱に入れて奥にしまっていては本が生きてこない。特に、大学図書館の本は先生や学生が読んで初めて生きる本ですからね。大学図書館の役割や使命を考えると、ここは難しいところですね。

渡邊　そのような「本の管理」という面で考えますと、史料編纂所でコツコツやっていらっしゃる「史料保存・修復作業」というのは、本当に大切な仕事ですね。先日、その保存・修復作業を拝見したんですが、これがまた、本当に気の遠くなるような大変な手作業でした。

樺山　「保存・修復」という仕事はあまり世の中で注目されませんが書物にとって決定的な作業でしてね。本は酸化したりネズミや虫が食ったりして傷みます。だから常に状態を見て、虫干しをしたり崩れた部分を直したりする必要があります。水害で水を被ってしまう場合などもありますが、読みやすい状態に戻すのは大変な作業で、もう、プロの仕事ですね。

西郷　そういう仕事は、やはり「日本人が文化をどのように捉えるか」という根本の部分につながっている気がします。「日本は紙と木の文化だから、建物で

「書物のアナログ性」というのは、人間の知的な仕事にとって必要なんですね。

さえも100年ごとに消えてなくなるのだ」という意識を変換しない限り、なかなか難しい。ヨーロッパには過去300年間、順番に修復し続けていて足場が取れたことがない古い教会がありますね。本来、本もそうあるべきなんですね。

大学図書館の使命は「サービス」

西郷　私は「国立大学の附属図書館である」という従来の考え方を変えなければと思っています。2年前の館長就任以来、事務部長らとともに頑張ってきたことは要するに「サービス」なんです。大学には一番向かない言葉、「サービス」。サービスができるかどうか……飲食店が新鮮な材料を仕入れて、料理を工夫するのと同じように私達も常に新鮮な材料を用意して利用者の学生や先生方に利用していただく。ではその新鮮さを保つにはどうしたらいいか？　これだけ冷凍技術

が進んだのだから、本だってそういうことに気を配るべきじゃないか、と（笑）。

渡邊　なるほど。では、その「サービス」という面も含めまして、これからの大学図書館のあり方はどうあるべきだとお考えでしょうか？

樺山　従来の大学図書館は大学の研究と教育に資するものでしたから先生と学生を対象に考えていましたが、現在は大分、事情が変わってきました。今は東大の図書館も市民がしかるべき手続を踏めば閲覧できるようですね？

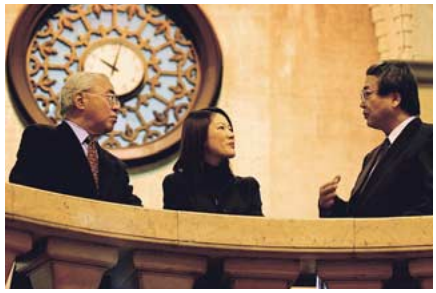
西郷　入り口で閲覧したい資料を申し出ていただければ、外部の方もご覧になれます。

渡邊　変わりましたよね。立派な建物ですから、一般の方にも中に入って見ていただきたいですね。2007年以降、いわゆる「団塊の世代」の方々が大量に定年を迎えますでしょう？「定年後の自由な時間を使って知的なものを求めよう」と大学に目を向ける方も一気に増えてきそうですね。東大が創立130年ということもありますし、市民に向けての新しい図書サービスなどはありますか？

西郷　そこがなかなか悩みどころでして……外部の方には貸し出しができないことになっているので、閲覧室で読んでいただくことになるんです。

渡邊　東大の図書館を覗いてみたい

考え方の切り口が違うだけで、本や図書館を大切にする心は皆同じだと思います。



という方は多いと思いますので、広く世間に公開してほしいという気持ちはありますね。まして、柏の立派な施設は。

西郷　柏図書館は、学術研究、調査、生涯学習を目的とされる場合は外部の方々もご利用いただけます。

樺山　図書館は、本を閲覧していただくという機能以外に社会的サービスとして「貴重な本を展示して見ていただく」という機能がありますね。総合図書館にも史料編纂所にも貴重本がたくさんあるので展示して見ていただく。まさか、国宝『島津家文書』を自分個人で引っ張り出して読むというわけにいかないですから。

西郷　総合図書館でも定期的に、ホールで展示をやっていますが……今、私達、図書館関係者は『メディア・ユニオン』というアイデアを持っています。これは、利用者が「電子データ資料の利用」と「書籍の閲覧」を両方できるスペースを作るというアイデアです。もちろん、自動書庫とITを駆使してスピーディな提供を行ないます。そのスペースに「プロムナード」を作ろうと考えていまして。プロムナードでは史料編纂所の保存書庫と連結して「一般公開できる展示場所」を設けようと計画しています。しかし、先立つものがなくて、なかなか進まないんですよ。

樺山　従来、「図書館が所蔵物を展示することは本来の機能ではない」と考えられてきましたが「実は本来の機能なのだ」と私は思いますよ。図書館が展示を行なうのは世界的な流れとなりつつあります。

渡邊　図書館サービスということで考えると、今、西郷先生が「自動書庫とIT」というお話をされましたが、柏図書館はまさに未来的サービスを始めていますね。

西郷　はい。柏図書館には100万冊分の蔵書を入れられる自動書庫を設置しました。その自動書庫と組み合わせる形でITも最大限に活用することになっています。

電子媒体と紙媒体は東大の図書館の両輪

西郷　私はまだ現役の学者のつもりですから、東大の図書館職員には「僕は

趣味で図書館をやっているんだ」と言っていますよ（笑）。趣味とは言っても、当初は遠い存在でしたね、図書館というものが。

渡邊　理系でいらっしゃるからですか？

西郷　ええ、理系であるがためにですね。振り返れば、自分の趣味で「おもしろそうだ」と本を買って読むことはあっても、読書に生きがいを感じることは少なかったと思います。しかし、小宮山総長が東京大学附属図書館長だった時代に館長補佐を２年間やらせていただいて「これは理系も文系もないな」と感じま

した。「考え方の切り口が違うだけで本や図書館が大事だという心はみんな同じなんだな」という思いを非常に強くしたんです。その時から「電子媒体と紙媒体は東大の図書館の両輪であると位置づけて、そのシステム作りとサービスをやろう」と考え始めました。その後、のめり込んだという感じですね。今、のめり込み中です（笑）。

樺山　私は東大の文学部西洋史学研究室に在籍していました。総合図書館から地理的に一番近い研究室なので、ごく間近に見てきたんです。館内に足を踏み入れると、右側の１階と２階に参考図書、リファレンスブックのコーナーがあります。たぶん、日本の国立・公立図書館の中で東大の図書館はリファレンスブックの揃いが一番良いと思います。私はあのコーナーを使うために図書館にごく頻繁

に行っていました。自分で百科事典を何種類も持つわけにいきませんのでね。これはお金の問題以上にスペースの問題で。ですから、図書館はリファレンスブックを整理して、次々と買い足していく所であってほしいと思います。その意味で恩を感じていますね。今、印刷博物館（凸版印刷）の館長をやっていますが、文字通り「印刷」でして。書物は印刷しなければ成り立ちません。私は「死ぬまで本から離れて暮らせない」ということになりますね……渡邊さんのお宅にも書物があるでしょう？

渡邊　とても少ないですね（笑）。

樺山　でも、本って、多い少ないは別にしても、自分の周りにあることで安心感とつながるんじゃないかな？

渡邊　そうですね。私は元々、文系でしたから、学生時代に使った『イギリス史』なんて本はいまだにとってありますし、それぞれの先生のお顔とともに覚えています。だけど、私、見事に物を捨てることが得意なんです。NHKに入局した頃、「秘書課では、まず最初に『有能な秘書は捨てることから始まる』と教わる」と聞きまして（笑）。それでも……作家の方々にお会いして人生をうかがう仕事の時など、その作家の作品を全部読まなければならないことがあります。そんな時は学生時代に教わった「本の読み方やコツ」が役立っていますし、書棚には「その人文庫」が一時的に増えていくんです。

東大の図書館に期待する

渡邊　現在でも、死海文書が出てきたり、日本でも木簡が発見されたりと、「残された記録」は後世の人間にとってかけがえのないものですよね。膨大な書物を東大がどのように受け継いで、文化遺産として残し、かつ、新しい研究に生かしていくか……とても大切なことだと思います。私自身、在学中には、そんなにも貴重な本が東大にあるとは知りませんでした。今後とも卒業生として利用させていただく上で、とても期待しております。

樺山　私もこの大学のOBですが、そうであるからこそ、東大にある本の量、質、その利用条件等について大変強い関心を持つようになりました。東大にいた頃はすぐ近くにあるので「自分のものだ」と思っていましたが、離れてみると、一市民としては「変えてほしい点」がいくつもあります。これほどのお宝がありますので、大切な資産として社会的にも文化的にも有効利用するためのお知恵を発揮していただきたいと思います。

西郷　ぜひ頑張っていきたいと思います。

平成18年12月５日
本郷キャンパス内のイタリアンレストラン、『カポ・ペリカーノ』にて

【4ページから11ページの各写真は、総合図書館を訪れた、お三方の様子です】

『カポ・ペリカーノ』での座談会の様子

樺山紘一　Koichi KABAYAMA
1941年生まれ。1968年 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。1990年 東京大学文学部教授。1995年 大学院人文社会系研究科教授。(97～98年 大学院人文社会系研究科長・文学部長)。2001年 国立西洋美術館長。2002年５月～東京大学名誉教授。2005年10月～ 印刷博物館館長

渡邊あゆみ　Ayumi WATANABE
1960年生まれ。1982年 東京大学教養学部イギリス科卒業。1982年NHK入局、アナウンス室着任。2006年６月～NHK日本語センター。現在、NHKチーフ・アナウンサー

西郷和彦　Kazuhiko SAIGO
1946年生まれ。1969年 東京工業大学理工学部化学科卒業。1993年 東京大学工学部教授。1995年 大学院工学系研究科教授。1999年 大学院新領域創成科学研究科教授。2005年４月～ 附属図書館長。2006年４月～ 大学院工学系研究科教授

A 和漢写真補遺（わかんしゃしんほい）
南葵文庫
総合図書館所蔵

B 啓蟄虫譜図（けいちつちゅうふず）
南葵文庫
総合図書館所蔵

東京大学所蔵·
文庫&文献コレクション

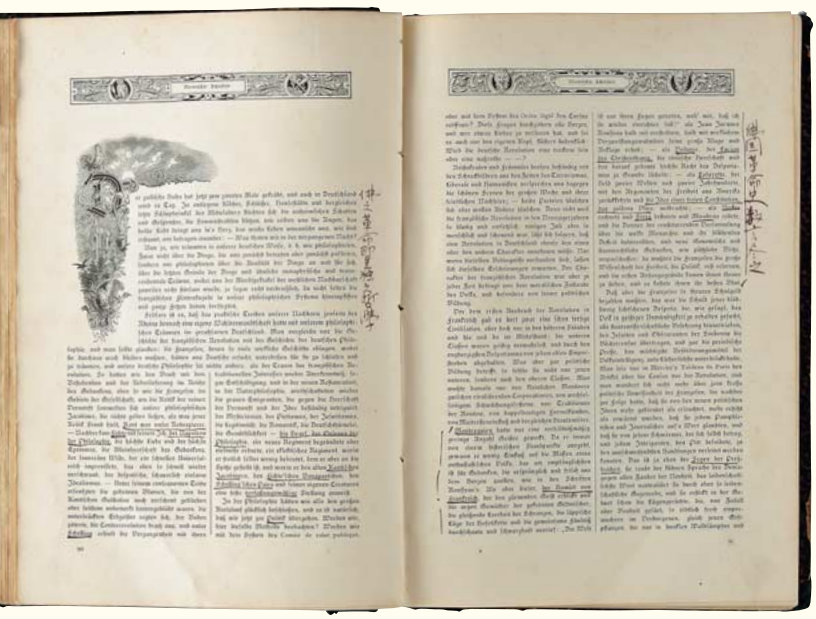
紙の至宝——知られざる貴重書の数々

本学の蔵書の特徴のひとつに
「貴重書の存在」が挙げられる。
脈々と息づく数多の古書、
度重なる災害を逃れてきた稀覯本、
そして、学者·作家の筆跡を生々と残す
「書き込み本」……これらはまさに
「紙の至宝」とも呼べるのではないか。

西野嘉章
総合研究博物館 教授

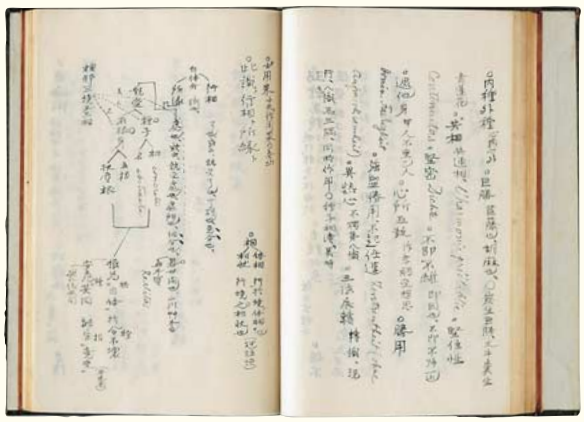
東京大学の誇るべき文庫·文献コレクション

東京大学は大正12年9月の関東大震災で壊滅的な打撃を蒙った。総合図書館も例外ではなく50万冊とも70万冊とも言われる貴重な蔵書を焼失した。この未曾有の災害の後、欧米各国や国内の篤志家から援助の手が差し伸べられたことは周知の通りである。爾来、東京大学の蔵書はいや増しに膨らみ、どれほどの数に達しているのか。平成17年度末の統計によると全学で850万冊近い数になるという。これに逐次刊行物14万タイトルが加わり総体としては膨大な数になる。この数字はあくまで図書館学的な統計数値に過ぎない。学内には学術標本に分類される図書類も数多蓄積されており、書籍の総量は容易に把握し難いのが実情である。しかし、確かなこともある。情報のデジタル化が進み、書籍増加率は頭打ち傾向にあるということ。特に医、理、工、農、薬等、理系の学問分野では学会誌等の電子版化が急速に進んでおり、もはや「ペーパー」を保存する必要がない。ということで、施設建物の改修を機に、部局や教室の図書室が閉鎖になるケースが出始めている。加えて、寄贈や寄託の申し出に対する対応も従前通りとは行かなくな



C
"Heinrich Heine's Werke"
Herausg. von Heinrich Laube,
6Bände,Wien, Bensinger.
鷗外文庫　総合図書館所蔵

鷗外が愛読したであろう『ハイネ全集』のうちの1冊。鷗外による書き込みがある



D 唯識鈔（ゆいしきしょう）
鷗外文庫
総合図書館所蔵

E 昔ばなし（雛豆本）
霞亭文庫
総合図書館所蔵
おとぎ話の豆絵本。〈写真・右〉は豆絵本を入れておくホルダー。目盛が付いている写真は原寸大

り、蓄積率の低下に拍車をかけている。

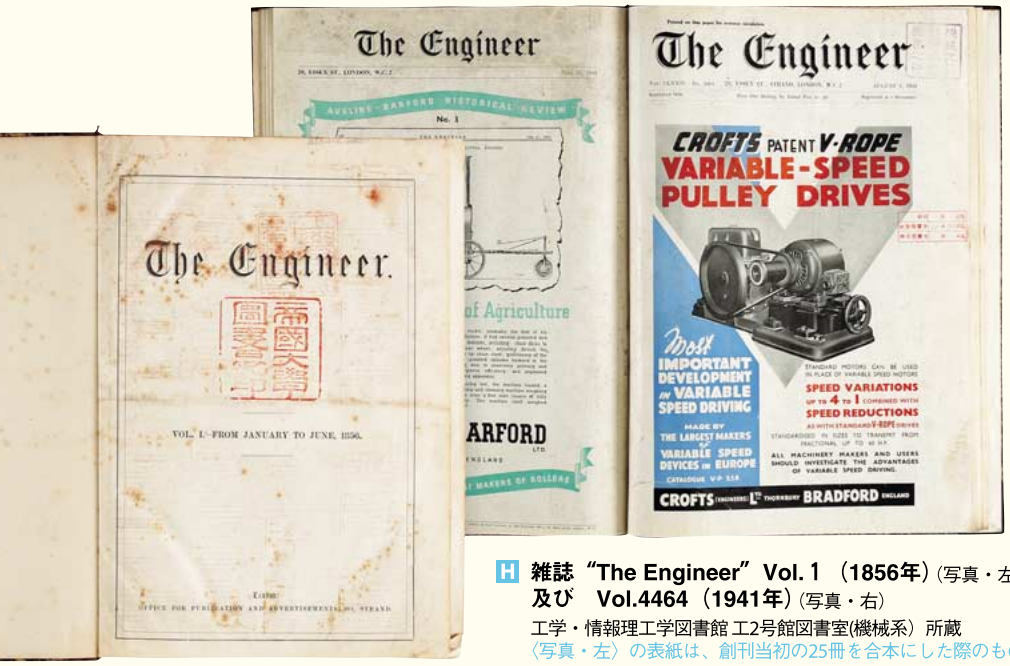
とはいえ、本学の蔵書がその量と質の両面で突出していることは間違いない。歴史的・学術的に誇るべき文庫を多数有しているからである。筆頭に挙げるべきは「南葵文庫」【写真A・B】である。これは紀州徳川家が明治35年に麻布飯倉の邸内に創設した私設文庫にその起源が遡る。明治41年に一般公開が始まったこの私設文庫は関東大震災の折も焼失を免れたが、震災の1ヶ月後、当主・徳川頼倫は文庫の閉鎖を決意し、蔵書のほとんどが灰燼に帰してしまった東京帝国大学附属図書館に10万冊近い蔵書を寄贈する。この文庫は、暦学、天文学、算学、文学、地理学、民俗学、本草学、軍学、物産学、洋学など近世諸学全般にわたるもので、震災後の大学復興の先駆けとして、米国の富豪ロックフェラーの支援を得て建てられた総合図書館の中核資料となった。鷗外森林太郎の遺贈本18,700点も貴重である。『唯識鈔』の自筆稿本、蕪村作『新花摘』の自筆写本、書入れのある本、創作の礎となった伝記、歴史、古地図、文学書の類等、「鷗外文庫」【写真C・D】はまさに第一級の文化財と言ってよい。一方、近世の文学・演劇に関する国内有数のコレクションとして知られる「霞亭文庫」【写真E・F】は震災後の収書活動の一環として購入されたものである。新聞記者を本業とする傍ら、小説や演劇脚本の創作においても知られる霞亭渡辺勝の旧蔵書で、浮世草子、洒落本、滑稽本、読本、黄表紙、浄瑠璃、歌舞伎書等約1,200点を数える。これらの中には長く「閲覧不可」「コピー不可」とされてきた艶本類も含まれる*。同類の文庫として、他に大野洒竹の収集になる俳書約4,700点の「洒竹文庫」もある。

『御成敗式目』の版本・写本・註解書約1,000点のコレクションは法科大学教授・穂積陳重の収集になる。穂積教授はこれ

F 天狗のたいり
霞亭文庫
総合図書館所蔵
明暦四年の刊本の写しとされている、胡蝶装の美しい奈良絵本

G Schedel, Hartmann. "Liber chronicarum" Nurnberg, 1493
亀井文庫　総合図書館所蔵
1493年にニュルンベルクで出版されたハルトマン・シェーデルの揺籃本『年代記』

* 編集部註：霞亭文庫は複写紙焼き版が 2000 年に用意され、艶本類の閲覧やコピーも可能となっています。



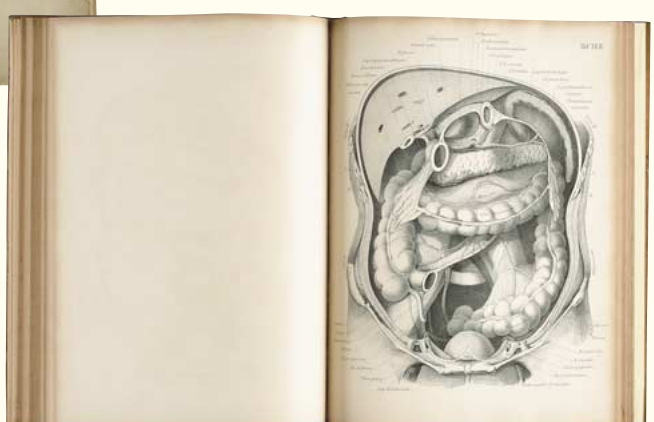
H 雑誌“The Engineer”Vol. 1（1856年）（写真・左）
及び　Vol.4464（1941年）（写真・右）
工学・情報理工学図書館 工2号館図書室(機械系）所蔵
〈写真・左〉の表紙は、創刊当初の25冊を合本にした際のもの

I 拾帖（くんしゅうじょう） 田中文庫　総合図書館所蔵
稀代の収集家、田中芳男によるチラシやラベル等のスクラップブック

らの書籍を図書館に入れるにあたり、桐箪笥の架蔵用キャビネットを特別に誂えた。寄贈資料の運用にあたってこの特製キャビネットが役立てられなかったことは、今にして思えば残念至極という他ない。また、安田財閥当主・安田善次郎も藩札コレクション25,000点（経済学部図書館所蔵）を寄贈する際、見事なキャビネットを用意している（こちらのキャビネットは、近年まで使用されていた）。ともあれ総合図書館蔵書で異彩を放っているのは個人の収集になる文庫群である。文庫の価値はその出自の確かさ、全体の纏まりに依存する。収集者の趣味や関心の在処、さらには時代や社会がその収集者に求めていたものが書目に反映しているからである。一例として「亀井文庫」【写真G】を掲げておこう。総数にして2,000点内外。19世紀刊本を中心とする洋書コレクションとしては規模も小さい。しかし、津和野藩主亀井家13代当主茲明がすべて自ら買い集めたもので、その稀少性は際立っている。茲明は西南戦争の始まった明治10年に弱冠17歳で英国へ留学し、ロンドン大学予科で3年を過ごす。帰国後、宮内省御用掛へ奉職し、明治17年に子爵位を授けられた。2年後、侍従試補官の職を辞して再度渡欧。ベルリン大学で美学美術史を学んだが、その傍らで故国日本の美術工芸振興のための博物館を構想し、日々の生活費を切り詰めながら来たるべき博物館のための書籍等を買い集めた。総理大臣の年俸が1万円前後の時代に総額10万円を収書に注ぎ込んだという。1493年にニュルンベルクで出版されたハルトマン・シェーデルの揺籃本『年代記』を始め、アルブレヒト・デューラーの『幾何学教本』ラテン語版（1584年）、ベルナール・ド・モンフォーコンの『古代図説』5巻10冊（1722年）、ナポレオンの東方遠征の学術的成果を集大成した『エジプト誌』第2版全24巻

J “A Catalogue of Books belonging to Adam Smith” Esqr.1781
アダム・スミス文庫　経済学部図書館所蔵
1781年にアダム・スミス自身が作成させた手稿の蔵書目録

K Wilhelm Henke
(Professor in Tubingen)
“Topographische Anatomie des Menschen Abbildung und Beschreibung:Atlas” Berlin,1879
ワルダイエル文庫　医学図書館所蔵

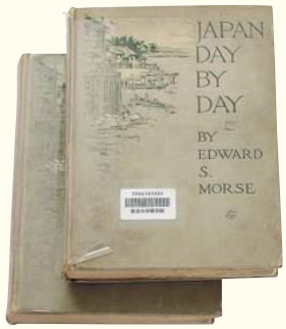


本と東大 1 COLUMN

小石川植物園にもあった「植物の貴重書」

貴重書は附属図書館所蔵ばかりとは限らない。中には意外な場所に所蔵されている貴重書もある。たとえば、大学院理学系研究科附属植物園小石川本園。ここには代々収集してきた西洋の博物学関連書と日本の本草学・植物学関連資料を集めた蔵書群がある。洋書ではドドエンス、リンネ、ケンペル、ツュンベルク、シーボルトの主要書目、18世紀以降の重要にして豪華な博物図譜類、和書では松岡玄達、平賀源内、小野蘭山、飯沼慾齋、水谷豊文、岩崎灌園、伊藤圭介等、近世から近代にかけて活躍した本草諸家の主著の多くが含まれる。未だ公刊されざる植物原画稿も多く、その包括性と網羅性の点で世界的に稀なものと言える。植物園に生息する、植物の貴重書。これもまた「本と東大」の関係のひとつなのだ。

※小石川植物園ホームページ　URL: http://www.bg.s.u-tokyo.ac.jp/



L（写真・上）
Morse, E.S.
"Japan Day by Day"
1917 年初版
理学部生物学科図書室所蔵
（写真・左）
1917年初刷の鉛板、および、Vol. 1 の木箱No. 8, 10
モース文庫
総合図書館所蔵

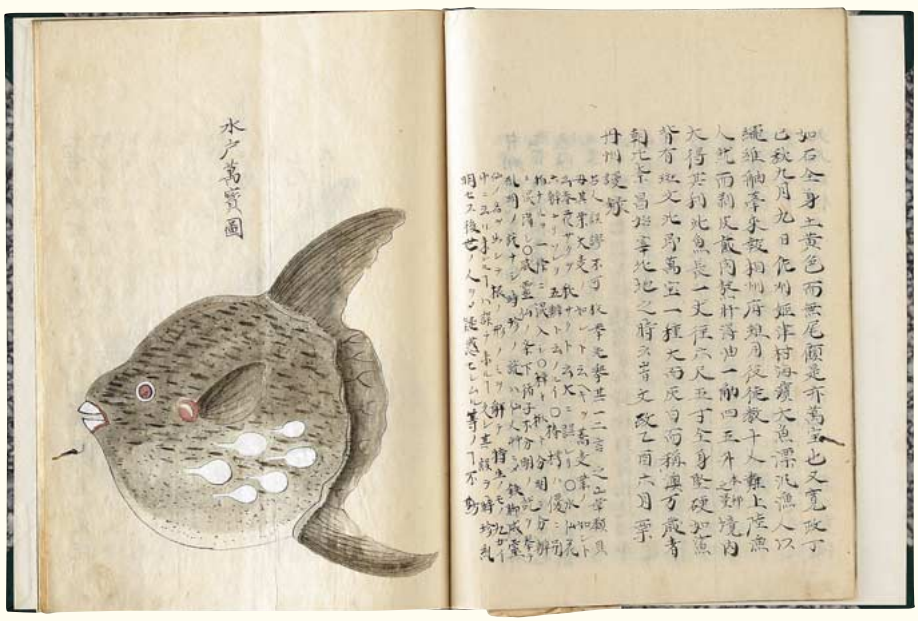
（1821-29年）、パリの書肆ディドが出版したジョヴァンニ・バッティスタ・ピラネージの建築雑纂全29巻20冊（1835-39年）等、出版史を画する大型稀覯本他、美術工芸の実技書や通交本の書目の総体に、日本の近代国家建設に貢献しようとする若き青年華族の熱い想いが結晶している。幕末～明治初期の日欧交渉に関する資料としては、内国勧業博覧会、万国博覧会、博物学の関係書6,000点を集めた「田中芳男文庫」【写真Ｉ・M】がある。理学部の御雇い外国人教師で大森貝塚の発見者、エドワード・S・モースの旧蔵書で、遺族から贈られた日本関係・自然科学関連書1,200点のコレクションも面白い。この中にはモースの日本滞在記録として知られる『Japan Day by Day（日本その日その日）』（1917年）の印刷に使われた鉛板一揃い【写真Ｌ】という珍品も含まれている。その他、17世紀フランスの政治史関連資料2,800点を集めた「マザリナード集成」、河口慧海らの収集したサンスクリット語仏教写本約500点とチベット大蔵経232包のコレクションもある。ダンテ著作の揺籃本『神曲』（1481年）、マルチン・ルターの著作の初版本、見事な挿図のシーボルト著作『日本誌』全7 巻（1852年）、英国政府から贈られたケルムスコット・プレス製作『チョーサー著作集』（1896年）等、歴史的に知られた稀覯書類も総合図書館の宝である。

学内の他部局にも有力な蔵書が存在する。工学・情報理工学図書館の工２号館図書室には、安政３年（1856年）の創刊から昭和16年（1941年）まで通号4,464号を数える最古の機械系専門誌『エンジニア』の一揃い【写真H】、御雇い外国人教師、チャールズ・D・ウェストの講義録や明治７年（1875年）のノート等の資料体が残されている。また、経済学部図書館には、新渡戸稲造が1920年にロンドンで入手し、「経済学者の宝物と申すべ

1

2

1. 本草図譜（小石川植物園で作られた写本）＜岩崎灌園著・1828年完成＞
2. Micrographia＜Robert Hooke著・1665年刊行＞



M
翻車考（ほんしゃこう）
田中文庫
総合図書館所蔵

N
兵法雄鑑抄
巻第三十～巻第五十二
藤原有常　天保14年（1843）11月
大類伸文庫
総合研究博物館所蔵

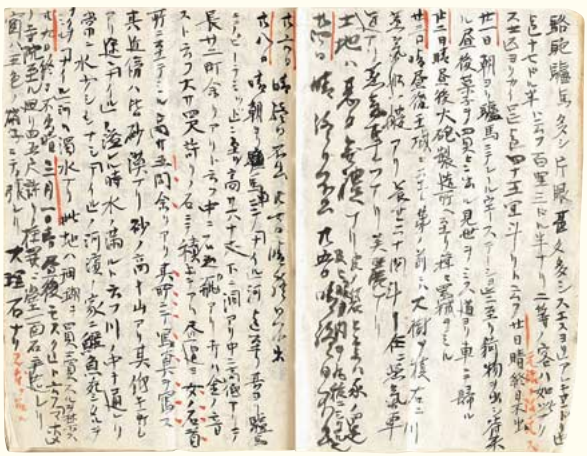
北条流兵法学の祖である北条氏長が正保２年（1645）に著した兵法書『兵法雄鑑』の一部を書写し、傍注あるいは頭注・脚注として解説を加えたもの。『兵法雄鑑』は全54巻からなり、徳川三代将軍家光に献上され、講義に利用されたという

P **江戸大地震之図**
国宝　島津家文書　史料編纂所所蔵

きもの」（同年７月23日付書簡）として本学に寄贈した経済学者アダム･スミス蔵書約140種300点のコレクション【写真Ｊ】がある。関東大震災で研究室が全焼した際に、教職員や学生達が搬出して危うく焼失を免れたと言われるものがそれである。「スミスが知見を広め、思想を練り、又その独居の幽情を慰むる友」（山崎覚次郎）とされる書籍類で、1781年にスミス自身が作成させた蔵書目録（手稿）を含む。医学図書館には解剖学他に関する西洋古刊本2,000点を集めた「ワルダイエル文庫」【写真Ｋ】が、人文社会系研究科には約300点の「ラフカディオ・ハーン文庫」と家伝の書籍3,500点を集めた「本居宣長文庫」が、史料編纂所には薩摩藩関連古文書17,000点を集めた「島津家文庫」（国宝）【写真Ｐ】が、法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター（明治新聞雑誌文庫）には吉野作造の遺贈品8,700点の「吉野作造文庫」、明治・大正・昭和を生きた稀代の出版人宮武外骨の収集品が、それぞれ残されている。

また、総合研究博物館本館には伊能忠敬の８舗組『大日本沿海輿地全図』（関東部のみデジタル復元）他の「山崎直方地図コレクション」がある。他に軍学・城郭史関連の古刊本・稿本を集めた「大類伸文庫」【写真Ｎ】、ユーラシア文化史の「江上波夫文庫」、西アジア考古学の「深井晋司文庫」、植物分類学の「大場秀章文庫」等があり、小石川分館には、徳川幕府遣欧使節に弱冠17歳で加わり、後に医家として大成した三宅秀の日記を含む「三宅家文庫」【写真Ｏ】、文化財保存・行政の実施と東アジアの考古・建築史で貢献のあった「関野貞文庫」がある。

いずれにせよ、ここに紹介したものは東京大学が誇るべき数多の文庫のごく一部に過ぎない。現在の私の職場である総合研究博物館においてもそうであるが、図書資料にせよ学術標本にせよ、ただ保



三宅秀（1848-1938）が幕府遣欧使節団に随行した際の日記。縦14cm×横10cm。中央縦方向に折り目がついており、道中半分に折って懐中していたのであろう。「ピーラミッド」を見物したことなどが記されている

O **欧羅巴エノ日記**
三宅秀　文久３年（1863）12月27日～元治元年（1864）７月20日
三宅家文庫　総合研究博物館小石川分館所蔵

東大本と2 COLUMN

反骨精神と明治文化を今に伝える「明治新聞雑誌文庫」

「近代日本法政史料センター（明治新聞雑誌文庫）」は法学部内の図書室のひとつ。明治大正期の新聞雑誌等を収蔵し、研究・教育のために公開している。新聞雑誌文庫としては日本最古、明治大正期のものとしては日本最大。実はこの文庫、東大の図書施設の中では、ずば抜けてユニークな施設なのだ。それは民本主義者・吉野作造と反骨ジャーナリスト・宮武外骨の個人的収集物を当初の所蔵資料として創設されたからである。特に宮武提供の資料には『スコブル』、『滑稽新聞』等、辛口ギャグで政府を痛烈批判した宮武本人編集の雑誌が含まれている。宮武は初代事務主任として、全国の貴重資料集めに奔走した。現在もこのちいさな文庫には反骨精神と明治文化が息づいている。

安政２年（1855）10月２日の夜、江戸を襲った直下型地震の被害と復旧過程を描いた「安政江戸大地震絵巻」の一部

存のことだけを考えればよいというものでもない。今日の研究ニーズに応えるかたちで活用がはかられてこそ、学術財としての存在意義があるのだから。デジタル・アーカイヴ化の推進は、そのためのひとつの方途であるが、それで事足りるわけではない。あくまでひとつの方途に過ぎない、そのように大学博物館的な立場から、あえて言いたいと思う。モノとしての書物の存在様態を、そのまま広汎な人々の眼前にパノラマとして提示できるような、収蔵展示型のオープンな稀覯書収蔵庫を大学として持つべき時代が来ているのではなかろうか。

1. 明治新聞雑誌文庫の玄関。屋外の半地下になっている
2. 吉野作造の旧蔵書『萬國公法』（西周助訳・1868年刊）
3. 宮武外骨編集の雑誌『滑稽新聞』自殺号（1909年刊）
4. 宮武が自署に用いていた「外骨マーク」

主な文庫・コレクション

	文庫名	数量	内容
総合図書館	鷗外文庫	18,700	森鷗外の旧蔵書。日本の歴史や文学などを中心に、伝記、江戸古地図等のほか、ドイツ留学中に収集したと思われる洋書など。http://rarebook.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/ogai/
	霞亭文庫	1,851	明治･大正期の小説家、渡辺霞亭が収集した江戸時代の小説類と演劇書。http://kateibunko.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/katei/
	亀井文庫	1,958	旧津和野藩主の家柄である亀井茲明が19世紀末のドイツ留学中に収集した西洋美術関係の洋書。
	鶚軒文庫	4,618	医学部教授であった土肥慶蔵（鶚軒）旧蔵書の中の和漢医学書。
	洒竹文庫 竹冷文庫 知十文庫	6,577	明治から昭和にかけての俳人であった大野洒竹、角田竹冷、岡野知十が各々収集した連歌俳諧書。
	青洲文庫	25,000	甲州の素封家であった渡辺家の寿、信（青洲）、沢次郎の三代にわたる、主に漢籍・国文学関係書からなる旧蔵書。伊藤博文の筆による額あり。
	田中芳男文庫	6,000	日本博物学の草分けの1人、田中芳男の収集した博物学及び博覧会関係資料。
	南葵文庫	96,000	紀州徳川家の旧蔵書で、南葵文庫自体が様々な個人文庫の集積でもある。徳川最後の将軍慶喜の筆による額あり。
	モース文庫	1,200	明治初期のお雇い外国人モース（Edward S. Morse）から送られた日本関係及び自然科学関係の資料。
法学部	宮武外骨関係資料		明治新聞雑誌文庫の創始者、宮武外骨刊行の新聞・雑誌・絵葉書等。
	吉野文庫	8,716	大正期の政治学者で法学部教授であった吉野作造の旧蔵書。
医学部	ワルダイエル文庫	約2,000	ドイツの解剖学者ワルダイエル（Wilhelm von Waldeyer-Hartz）の旧蔵書。主に解剖学関係の著書・文献、動物学・人類学関係書など。
文学部	市河文庫	約1,200	文学部教授であった市河三喜旧蔵の19世紀末～20世紀初頭の英語学・言語学関係論文。
	ハーン文庫	303	市河三喜旧蔵の小泉八雲（Lafcadio Hearn）の著作・訳書・研究書及び雑誌記事等。
	本居文庫	3,534	本居宣長及びその子孫・門下の自筆本・写本。
経済学部	アダム･スミス文庫	314	アダム・スミス（Adam Smith）の旧蔵書。
	エンゲル文庫	1,160	ドイツの統計学者エンゲル（Ernst Engel）の旧蔵書。
教養学部	狩野文庫		旧制第一高等学校長である狩野亨吉の日記・来翰など。
	木谷文庫	228	演劇・浄瑠璃研究家木谷蓬吟旧蔵の幕末・明治の浄瑠璃関係史料。
情報学環	小野文庫	1,144	前身である新聞研究所の実質的な創設者小野秀雄が収集したかわら版、新聞錦絵、号外など。http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/pblc-achv/digital_archive/ono_collection/contents/index.html
東洋文化研究所	大木文庫	3,168部	北京在留の弁護士であった大木幹一より寄贈された中国法制関係資料。
	雙紅堂文庫	3,000	書誌学者長澤規矩也旧蔵の明清時代の戯曲・小説類。
	ダイバー･コレクション	367	ダイバー（Hans Daiber）収集のイスラーム世界の伝統的文化全般に関わる写本コレクション。
社会科学研究所	糸井文庫	10,500	東京職業紹介所長などを務めた糸井謹治の収集による日本労働事情関係資料。http://library.iss.u-tokyo.ac.jp/collection/itoi.html
	極東軍事裁判記録	454	極東軍事裁判の公判、弁護関係資料。
	ドイツ労働総同盟(DGB)旧蔵文書	7,000	DGB 旧蔵の 1900 年初頭から 1970 年代に至る資料。http://library.iss.u-tokyo.ac.jp/collection/dgb.html
史料編纂所	島津家文書	約17,000	平安時代より江戸時代に至る薩摩藩島津家伝来の文書群。国宝に指定。
	宗家史料	約2,900	対馬宗家の江戸藩邸に伝来した史料。
	徳大寺家史料	約4,400	旧公爵徳大寺家伝来の公家史料。
	益田家文庫	約7,600	石見の豪族益田家の中世以来の史料。

（2007年２月現在）

※亀井文庫、鶚軒文庫、田中文庫、南葵文庫、モース文庫の５つに関しては以下のURLをご参照ください。
マルチメディア展示会　http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/koho/tenjikai/

保立道久史料編纂所長と渡邊あゆみさん。1,000冊を超える史料編纂所出版史料集の前で

史料編纂所

収集と編纂——歴史情報を編み上げる果てしない作業

百年以上も昔から史料の「収集と編纂」を続けている史料編纂所。ここでは、集められた史料から着々と新たなコンテンツが編み上げられてきた。1,000冊を超えるその編纂物は、日本史研究者にとって、貴重な研究資源なのだ。

史料編纂所を訪ねて
渡邊あゆみ
NHK
チーフ・アナウンサー

在学中には存在も知らなかった研究所が東大にはたくさんあるのですが、その１つが『史料編纂所』です。まず、『大日本史料』の書棚の前でその膨大な内容に驚き、「予定の12編まで刊行するにはあと何百年かかるのか判らない」と宮崎勝美教授に言われて、担当者の熱意に敬服しました。

驚くのはまだ早く、上階に案内されると、そこは特別収蔵庫。国宝指定された島津家文書の眠る部屋です。1587年に送られた豊臣秀吉朱印状など貴重な資料を拝見していると、

その奥に黒漆塗の島津家文書箱が鎮座。西南戦争の折に家臣が命を賭けて城から運び出したからこそ、国宝級の文書が残ったと聞きました。歴史的な遺産が人間の寿命をはるかに

宮崎勝美
史料編纂所 教授
副所長

史料編纂所の史料収集と編纂･データベース

史料編纂所は、古代から明治維新に到る日本史史料の研究・編纂を中心事業とする研究所です。その淵源は、1793（寛政５）年に国学者塙保己一（はなわほきいち）が江戸幕府の援助を受けて開設した和学講談所にさかのぼります。1869（明治２）年、明治政府によって開設された史料編輯（へんしゅう）国史校正局がその事業を引継ぎ、その後1888（明治21）年国史科創設に伴って帝国大学に移管されました。史料編纂所という現在の名称になったのは1929（昭和４）年のことです。

その間、研究・編纂の基礎となる史料の収集は1885（明治18）年から本格的に始められました。“収集”といっても、史料原本そのものを集めて来るわけではなく、影写（敷き写し）・謄写（見取り写し）・模写（絵画史料の写し）といった技法により写し（複本）を作成して、研究・編纂に使う方法が採られました。第２次大戦後はマイクロフィルムによる写真撮影が中心となり、現在では毎年約10万コマの出張撮影が行われています。

100年以上にわたるこうした収集活動の結果、10万点余りの複本が作成されました。また長い経過の中で、史料所蔵者からの寄贈を含め、多くの原本も蓄積されて来ました。現在では国宝１件（島津家文書）・重要文化財13件をはじめ、20万点近くの貴重史料が書庫に収められています。史料編纂所の図書室は、いわゆる「図書」（活字本）よりもそれらの「史料」を数多く所蔵し、研究・編纂事業だけでなく所外・学外の日本史研究者に広く公開利用されているのが大きな特徴です。

史料編纂所は1901（明治34）年以来、これら多数の収集史料をもとにして史料集の編纂・刊行を行って来ました。『大日本史料』・『大日本古文書』などの書目名で刊行された基幹的史料集は、総計1,000冊を超えています。また1980年代以降、その成果を歴史情報データベースとして組み立て直す事業を新たに行っています。現在公開されているデータベースは25種類に及び（次頁参照）、所外からのアクセス数は多い時で月 190万件台に達しています。100年以上続けて来た紙媒体による史料集の編纂・刊行と、データベースという新しい形態による歴史情報の提供は、今後史料編纂所の事業の両輪として位置づけられていくことでしょう。

史料編纂所出版史料集

大日本史料	380冊
史料綜覧	17冊
大日本古文書	217冊
大日本古記録	116冊
大日本近世史料	127冊
大日本維新史料	43冊
日本関係海外史料	38冊
正倉院文書目録	5冊
日本荘園絵図聚影	7冊
花押かがみ	6冊
その他合わせて	1,000冊以上

（2005年度まで）

主な所蔵史料・図書

図書（版本を含む）	168,254冊
うち和漢書	161,943冊
洋書	6,311冊
史料（原本・写本類）（国宝1件､重要文化財13件を含む）	195,410点
史料（史料編纂所作成複本）	110,329点
うち影写本	7,105冊
影写本（複製本）	4,436冊
謄写本	22,705冊
写真帳	39,388冊
台紙付写真	23,222冊
模写・拓本	3,589点
稿本	9,845冊
模造	32点
古写真	7点
逐次刊行物	2,703種
うち和雑誌	2,505種
洋雑誌	198種
フィルム類	64,242点
うちマイクロフィルム	48,018リール
シートフィルム	7,224タイトル
ガラス乾板	9,000枚
電子出版物(ビデオテープを含む)	714タイトル

（2006年3月31日現在）

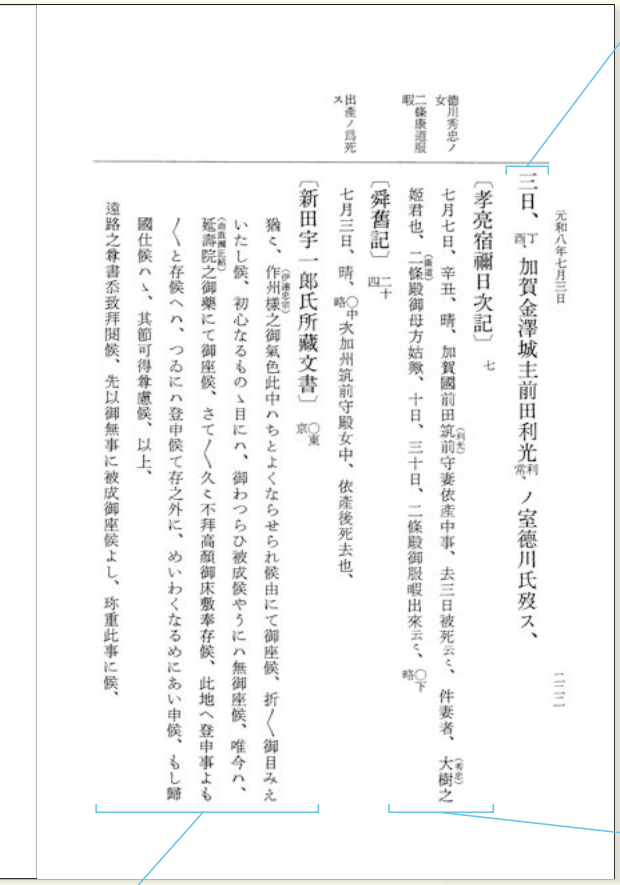
超えて生き残るのは、守った人がいるからだという至極当たり前のことに改めて感動を覚えたのです。

続いて古文書の保存・修復作業を見学する

ため階下の史料保存技術室へ。そこで出会ったのは恐ろしく気が長い職人集団でした。虫食いだらけのボロボロの和紙をピンセットではがしたり貼ったりと「ジグソーパズルと障子貼り的」作業に終日専念する中藤・髙島・山口チーム。原本を毛筆影写する和田さんは大学で書道教育を専攻したそうですが、教壇には立たず古文書に向かう日々。何度も練習を繰り返した後、影写本番に臨む時には「真剣影写中」の札を掲げます。誰も寄せ付けない気迫はまさに原本筆者との真剣勝負。鬼籍

に入った筆者の息遣いすら甦ります。その向い側には史料保存技術室の紅一点、村岡さんが絵画史料を模写していました。原本が消えかかっていて重ねた和紙に透けて見えない時

編年体史料集『大日本史料』の1ページ



元和八年七月三日

三日、丁酉、加賀金澤城主前田利光利常ノ室德川氏歿ス、

〔孝亮宿禰日次記〕七

七月七日、辛丑、晴、加賀國前田筑前守妻依產中事、去三日被死云々、件妻者、大樹之姫君也、二條殿御母方姑歟、十日、三十日、二條殿御服暇出來云々、

〔舞舊記〕二十四

七月三日、晴、中略○中夫加州筑前守殿女中、依產後死去也、

〔新田宇一郎氏所藏文書〕東京

猶々、作州樣之御氣色此中ハちとよくならせられ候由にて御座候、折〳〵御目みえいたし候、初心なるものゝ目にハ、御わつらひ被成候やうにハ無御座候、唯今ハ、延壽院之御藥にて御座候、さて〳〵久く不拜高顏御床敷奉存候、此地へ登申事よも〳〵と存候へハ、つゐにハ登申候て存之外に、めいわくなるめにあい申候、もし歸國仕候ハゝ、其節可得尊慮候、以上、

遠路之尊書忝致拜閲候、先以御無事に被成御座候よし、珎重此事に候、

出產ノ爲死ス

德川秀忠ノ女二條康道服暇

綱文

年月日を追って編纂されている編年体史料集『大日本史料』は、その日に関係する事件や出来事を簡潔にまとめた「綱文（こうぶん）」という文章からまず始まります。図版の綱文は、「元和8年（1622）7月3日、3代加賀藩主前田利常の正室が亡くなった」というものです。こうした綱文は、過去100年以上にわたる研究・編纂の過程で約30万件作成されており、現在ではそれらがすべてデータベース化されています。『大日本史料』が編纂対象とした9世紀末から明治維新期まで前後約1,000年にわたる期間の、きわめて詳細かつ膨大な年表データベースということができます。

編年史料綱文データベース検索画面

引用史料その1「孝亮宿祢日次記」

綱文の事実を裏付ける史料が次々に引用されます。この史料は、公家の壬生孝亮（みぶたかすけ）の日記「孝亮宿祢日次記（たかすけすくねひなみき）」の一節です。前田利常の正室は金沢で亡くなりましたが、京都にいた壬生孝亮は4日後にそのことを伝え聞いて日記に書き留めています。この史料は宮内庁書陵部に所蔵されており、史料編纂所ではそれをマイクロフィルムで撮影し、写真帳にして研究・編纂に利用するほか、閲覧にも供しています。史料編纂所にはこうした写真帳が3万冊以上収められています。

引用史料その2「新田宇一郎氏所蔵文書」

仙台藩伊達家の家臣の書状の中にも前田利常正室の死去に関する記事が含まれていました。この史料は「新田宇一郎氏所蔵文書」という影写本に収められています。影写本は、史料の写真撮影が一般化する以前の明治初年から全国各地の史料を収集するために多数作成されました。現在史料編纂所には7,100冊余りの影写本が所蔵されており、そのうち所蔵者の許可を得られたものについてはインターネット上で画像が公開されています。

影写本画像表示画面

史料編纂所の史料収集と編纂・データベース

史料編纂所では、史料編纂の効率化を図るため、また出来上がった史料集をより便利に利用したり、所蔵史料の公開利用を促進するため、様々なデータベースを作成してきました。現在ウェブ公開（http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/index-j.html）しているものは、所蔵史料の目録情報、日本史上のできごとを網羅した詳細な年表、史料に記されている人名・地名・事項名などの索引、日記や古文書などの全文情報、肖像画や錦絵など絵画史料の画像情報など25種類に及びます。

模写・徳川家康画像（原本寛永寺所蔵）

公開中のデータベース

所蔵史料目録DB	大日本史料索引DB
古文書目録DB	中世記録人名索引DB
大日本史料総合DB	花押カードDB
古記録フルテキストDB	歴史絵引DB
古文書フルテキストDB	肖像情報DB
奈良時代古文書フルテキストDB	史料編纂所所蔵肖像画模本DB
平安遺文フルテキストDB	史料編纂所所蔵荘園絵図摸本DB
鎌倉遺文フルテキストDB	摺物DB
編年史料綱文DB	錦絵DB
近世編年DB	古写真DB
維新史料綱要DB	応答型翻訳支援システムDB
近世史編纂支援DB	欧文日本古代史料解題辞典DB
	電子くずし字字典DB

には、重ねては外し重ねては外しの作業を素早く繰り返し、「残像」を利用して模写するのだそうです。大学では日本画を専攻された村岡さん。手弱女のタフな精神力に敬服しました。写真室では谷・中村両氏が翌日からの鳥取出張採訪に備えて撮影機材の整備に追われていました。史料写真撮影に加え、顕微鏡や赤外線デジタルカメラの使用で紙質分析までも可能になったのだそうです。写真室は2008年に100周年を迎えるとのこと。こんな地味、いや地道な作業を100年も続けてきたのです。

コンピュータ全盛の時代でも、史料編纂所を支えているのは、気の遠くなるような作業に真正面から取り組み、己の才能を史料に投影させながら、歴史的遺産を未来に受け継ぐことに情熱を注ぐ「人」たちでした。強くて温かい人の手を経るからこそ、世界に誇れる日本の史料が守り伝えられているのです。

本と東大 3 COLUMN

図書担当者の永遠の戦い「文学部カビ燻蒸奮闘記」

本は時間経過とともに汚れる。そして、傷む。その原因の多くは虫とカビ。特にカビは人体にも害を与える。本のカビを吸い込んで肺炎になることもあるのだ。だから膨大な書籍を抱える東大にとってカビ対策は深刻な問題だ。学内各図書館（室）の図書職員は皆、頭を悩ませている。

カビ対策は、単に除湿機を回すだけでは有効ではない。その前にすべてのカビを根絶しておかなければすぐに再発生してしまうからだ。カビ根絶には「薬剤による燻蒸」が一番の手段なのだが、昨今ではその燻蒸剤の人体への影響も叫ばれている。そのため、カビ対策はきわめて難しい問題となっている。そこで、昨年大がかりな「カビの燻蒸」を行なった文学部に赴き、陣頭指揮を執った風巻みどり文学部図書室主査にお話をうかがった。

「最初はひとつの研究室から、ひどいカビ本が発見されたんです。それで一昨年11月にその研究室だけ燻蒸を行いました。ところが、その後、次々に各研究室からカビが発見されて……」

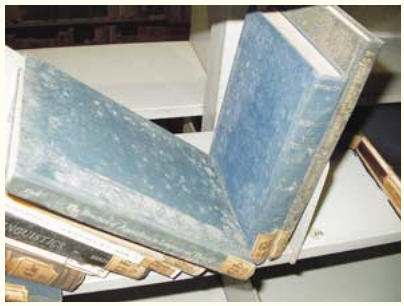
結局、11研究室（全研究室数の1/3）でひどいカビ本が発見される。かくして「文学部カビ燻蒸作戦」は昨年８月11日～17日に大々的に実行されたのであった。お盆を選んだのは構内に人が少ない時期だからだ。人体に影響を与える燻蒸ガスの取り扱いは細心の注意を必要とするため、燻蒸現場の周囲に人が少ないほうが良い。しかしながら、燻蒸ガスの毒性は時間とともに消える。そこで、７日間のうち、実際に燻蒸を行なうのは３日目だけとし、1～2日目は「準備」に、4～7日目は「ガス抜き」の期間に充てた。

「その『準備』が大変でした。法文１号館書庫、法文２号館書庫、文学部3号館書庫に燻蒸場所を限定して、文学部全体のカビ本を搬入しました。終了したら元に戻すわけですね。燻蒸場所を限定したのは、燻蒸薬剤の漏れを防ぐために、建物全体を立ち入り禁止にしなければならなかったからです」

東大の建物は立派だが、古い。だから、ガスが漏れないように書庫全体を密閉し、建物を立ち入り禁止にしたのである。お盆とはいえ、構内から完全に人がいなくなるわけではないので、風巻さんは気が気ではなかったにちがいない。

結局、「文学部カビ燻蒸作戦」は無事完了した。以後は燻蒸直前に設置した67台の除湿機によりカビ再発生はほぼ見られないという。「本のカビは飛んできた胞子によって、すぐに再発生します。ですから常に除湿してカビの繁殖を抑える必要があります。また、文学部に新たに入って来る書籍の中にはカビの生えた古書も多数ありますので、消毒用エタノールで丹念にカビを拭き取っています」と風巻さん。

図書担当者にとってカビ対策は、「永遠の戦い」と言えるのかもしれない。



燻蒸とは?

薬剤でいぶして殺虫・殺菌等を行なうことを燻蒸と言います。室内を密閉して薬剤を充満させ、一定時間おくことにより効果を発揮します。家庭用燻蒸剤はゴキブリ・ダニ退治等に使われています。

本と東大 4 COLUMN

立て置きか? 平積みか? 和装本の保管のお話

近世以前、和装本は平積みにして保管するのが普通であった。また、書目を見分けるために下小口（したこぐち・本の底の部分）に題名・著者名等を書き込むこともよくあった。何らかの補強をしない限り、柔らかい和装本を立てて保管すると歪みやすくなる（薄い雑誌をファイリングせずに立てて保管する時に似ている）。だから、平積みにされていたのかもしれない。

しかしながら、現在の図書館の書架には本が「立て置き」で保管されている。これは洋装本に限らず、和装本にも当てはまる。和装本を「立て置き」している図書館では、書目単位で帙（ちつ）に収めたり、１冊ずつサイズを合わせて作った保存箱（アーカイバルボックス）に収めて保管したりしているケースもあるようだ。

立て置きか？　平積みか？　一口に「本の保管法」と言っても、時代時代によって変遷を遂げてきているのである。

本学の史料編纂所では、一部の和装本が「平積み」にされている。写真は島津家文書のうち『神社調』。薩摩藩が領内の神社の由来を神社ごとに書き上げたものである

東京大学電子ジャーナル事情

学術の世界に広がる「電子化」の波

インターネットの出現により、私達の生活はドラスティックに変わりつつある。
その変化は書籍・文献にも及び始めている。
「電子化」の波は急速に学術の世界に広がっていく。

高増 潔
大学院工学系研究科 教授

現在、特に学術の世界では、書籍や雑誌の電子化が急速に拡大しつつある。ここでは、理科系の本学教員から見た「最近の電子ジャーナルの利用状況とその問題点」について説明したい。

電子ジャーナルの利用方法

画面1は、学生のネットによる情報収集の教育などに使いやすいように、情報基盤センターが提供している学習ツール「ネットでアカデミック」である。このツールを利用することで、電子ジャーナルなどの利用の仕方を簡単に学習することができる。従来の「輪講」という科目では、教員が読むべき文献を用意し、教員が設定したテーマに従って、図書館で学生が文献を探してから、実際に文献を読み、発表する手順で行われていた。現在では、学生は、まず電子ジャーナルの検索方法を学習し、教員のテーマに従って必要な電子ジャーナルを全てネットワーク上で手に入れることができる。

画面2と画面3は、電子ジャーナルを検索している例である。画面2は検索条件の設定の例であるが、実際はもっと複雑なキーワードや、著者、雑誌などの条件が設定できる。このような条件で、電子ジャーナルのデータベースを検索すると、画面3のような条件にあった論文リストが表示される。これらの論文の大部分は、フルテキストがPDFファイルなどの形でネットワーク上において閲覧可能である。必要な論文のフルテキストをダウンロードすれば、自分のパーソナルコンピュータ上で、論文を読むことができ、発表用の資料などを作る手間も少なくなる。このように、教員も学生も、従来、図書館等で行っていた文献の検索や文献をコピーする作業が、すべてネットワーク上で行うことが可能になった。

東大における電子ジャーナル

東京大学においては、図書館によって電子ジャーナルへの対応が行われている。現在*約5万タイトルの雑誌が、電子ジャーナルで出版されているが、このうち、東京大学では約3万タイトルの電子ジャーナルを読むことができる。図1は東京大学における電子ジャーナルの利用回数で、2004年には約135万回利用され、非常に多くの利用があることが分かる。図2は、外国雑誌の印刷版と電子ジャーナルの購読状況の推移である。従来は冊子

* Ulrich's Periodicals Directoryによる

本と東大5 COLUMN

学生生活実態調査に見る「本と東大生」の今昔

「大学生が本を読まない」と言われるようになって久しいが、書物の国の住人、東大生はどのように本と関わっているのか？

東京大学学生生活実態調査の結果にある「蔵書数201冊以上の者の割合」を約10年ごとに見てみると、右の表のようになる。1979年が58%、1989年が33.4%、2000年がなんと、15.8%！このデータだけを見ると、東大生もかなり本離れしているように思えるが、実は別のデータでは違う傾向が表れている。「4月から調査月（11月～12月）までの期間の読書冊数平均」の調査結果を見ると、79年が36.4冊、89年が34.2冊、00年が39.1冊となっていて、現在までの二十数年間、東大生の読書量はあまり変わらない状態が続いているのだ。読む量はあまり変わらないのに持っている量ははっきりと減り続けている……いずれのデータも平均値なので明確に言い切ることはできないが、この結果は東大生の「モノとしての本」への愛着が薄れてきていることを示しているように思える。この特集の座談会で「学内図書施設等の蔵書量が増えすぎて所蔵スペースが足りない」という問題が挙げられていることを考えると、学生と教員では「本に対する愛着」において、かなりのギャップが生まれつつあるのではないだろうか。

ちなみに、「好きな著者・作家」のデータは右の表の通り。79年の第2位にドストエフスキーが入っているが、この頃はまだ、翻訳された外国文学を読んで教養を積もうとする姿勢が多くの東大生に見られたということなのかもしれない。また、90年代以降、「夏目・村上・司馬」の三氏がダントツ人気を誇っている。特にすごいのが夏目漱石。（このデータでみる限り、）20年もの間、ベスト3の常連になっている。他大学のデータではどうなのか分からないが、東大に限っていうならば、さすが、文豪の影響力は21世紀でも絶大というところか。

東大生全体における蔵書数 201 冊以上の者の割合

1979年（学部男子）	58%
1989年（学部男子）	33.4%
2000年（学部男子・女子）	15.8%

東大生が好きな作家

1979年	1位：夏目漱石 2位：ドストエフスキー 3位：筒井康隆
1989年	1位：夏目漱石 2位：司馬遼太郎 3位：村上春樹
2000年	1位：村上春樹 2位：司馬遼太郎 3位：夏目漱石

東京大学・学生生活実態調査より

で購入していた外国雑誌が、電子ジャーナルへと急速に移行しているのが分かる。また、電子ジャーナルの購読額は年々増加している。

問題点について

以上のように、学生にとっても教員にとっても電子ジャーナルは不可欠の共通インフラとなっている。しかし、電子ジャーナルの購読額をどのようにして維持していくかは大きな問題であり、部局単位ではなく、東京大学全体として予算の共通化を含めた対応を行っている。また、論文の検索がデータベースにより便利になった反面、論文誌を図書館でじっくり読むことにより関連する近い分野の情報に触れる機会がなくなり、検索のキーワードだけに依存し、非常に狭い視野で研究領域を捉えることも指摘されている。

電子ジャーナルに対しては、その便利さを生かしながら、予算の対応、今後の情報検索の方法を教育面、研究面でより優れた方法にしていく必要がある。

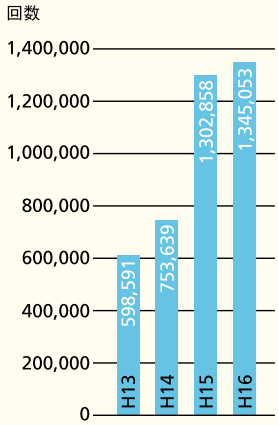
1

3

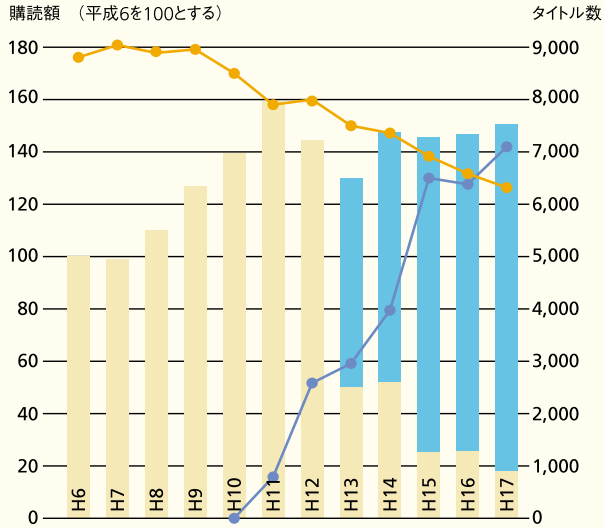
【画面1】ネットでアカデミックon Web
【画面2】電子ジャーナルの検索画面の例：Author がKOMIYAMA HIROSHI、Journal article（雑誌論文）、Theoretical（理論的）、English（英語）、2000年～2007年の論文を検索している
【画面3】画面2の検索結果：該当する論文のリストが表示される

2

【図1】
電子ジャーナル利用回数



【図2】外国雑誌は急速に電子ジャーナルへ移行しつつある
印刷版と電子ジャーナル購読状況の推移
（外国雑誌前金一括購入分）



※図1、図2：『図書館の窓』vol.44 No.5 (2005.11)より

本と東大 6 COLUMN

東大の知を世に送り出す出版社「東京大学出版会」

東京大学出版会（以下、出版会）は主に本学の学術成果を世に送り出すために作られた国立大学初の「大学出版部」である。設立は1951年。英米の各有名大学出版局をモデルに設立されたが、英米の大学出版局が「大学の一部局」であるのに対して、出版会は本学から独立した財団法人となっている。独立組織だから国の資金援助は得られない。当然、「売れる本」を出さなければ倒産してしまう。いわば、歴とした「出版社」なのだ。

出版社だから、しっかりヒットも飛ばしている。ここ十数年間でのヒットと言えば、『知の技法』（小林康夫・船曳建夫編　1994年刊）と『教養のためのブックガイド』（小林康夫・山本泰編　2005年刊）。ともに本学教員が編者・著者となっている本である。この両書、実は本学構内の生協書籍購買部よりも、市井の書店で火がついたためにヒットとなった。知的興味を持つ読者層が作り出したヒットだと言えるわけだ。さらに、出版会の主力商品となっているのは「大学の教科書」。他大学での使用も想定して作っているため、「教科書」の売上が売上全体の４割を占めるとのこと。

しかしながら出版会の本領は学術書だ。過去の刊行書籍点数は6,000点以上。本学教員・本学出身者が関わった書籍は80％を超える。学術書は一般書と比べて売上が低いようだ。「学界の評価は高いのに売れなかった本」を３回続けて出すと、その分野の本は出しにくくなるなどと業界では言われているという。独立採算は大変である。

本学法人化後、企画の多様度が高まったという。学内の学術映像のDVD全12巻や学内風景写真のポストカード等を刊行している。今や、出版会は学術情報発信だけでなく学内コンテンツ発信基地に変わりつつあるのだ。

写真左／月刊『UP（University Pressの略）』。学問をめぐるエッセイ・小論等を掲載。　写真右／『教養のためのブックガイド』小林康夫・山本泰編　2005年刊。本学の教員が様々な教養書を紹介している

柏図書館

未来型図書館サービスが大学を変える

あらゆるサービスは人々のニーズに答えて進化を遂げるものだ。図書館サービスもまた、同様。
柏図書館は、私達の脳裏に鮮やかな「近未来の図書館像」を浮かび上がらせてくれる。

合田美恵子
柏図書館専門員
兼 柏図書館情報サービス係長

つくばエクスプレス線柏の葉キャンパス駅西口からバスで10分程の場所に、東京大学柏キャンパスがあります。柏図書館は、この場所に平成17年２月22日正式開館しました。２階建ての建物の南北及び東の３面はガラスカーテンウォール構造で、内部に外光を取り入れた明るく開放的な雰囲気を持っています。

柏キャンパスは東京大学の本郷・駒場・柏という三極構造構想の一翼を担っています。この中で柏図書館は、東京大学が柏キャンパスや新領域創成科学研究科の創設時に掲げた理念である「学融合」と、その実現のための基本的な精神である「知の冒険」を実践する場として生まれました。このため柏図書館は、次世代型図書館として、ハイブリッドライブラリ機能、サイバーメトリック機能、ソーシャルコミュニケーション機能というコンセプトで計画されました。ハイブリットライブラリ機能としては、利用者が図書・雑誌・オンラインリソース・映像など多様な学術情報資源にアクセスし情報を活用できるよう、サービスを提供しています。また、全学の自然科学系学術雑誌のバックナンバーセンターとしての役割を持ち、100万冊相当収容規模の自動化書庫に蓄積した学術情報資源をe-DDSサービスを通じて学内に提供しています。

サイバーメトリック機能としては、高機能な計算機を備え、多様な情報コンテンツを作成・加工し、新たな知の創造に役立てることを目指して、現在ナレッジワークスタジオの設備を整備中です。

ソーシャルコミュニケーション機能としては、異分野や海外の研究者・学生と協働し学融合を図るためのクリエイティブ空間の提供を行っています。また、教育学習空間だけでなく、社会文化的空間の充実を図り、地域社会・産業界との連携・協働も可能にしています。具体的にはメディアホールやコミュニティサロンを大学と地域の交流の場として提供し、閲覧室の開放など地域に対して東京大学の蓄積した情報を提供しています。

この他、柏図書館は従来の図書館機能に加えて交流機能を併せ持つと共に、憩いの場の提供も重要であると考えています。時代の変化に呼応しつつ、新しい大学図書館モデルを築き上げることを目指しています。是非一度お越し下さい。

e-DDSサービス* 〈学内向けサービス〉

利用者から閲覧依頼された文献を電子ファイルで提供するシステムです。現在、柏図書館のみならず総合図書館（本郷）や駒場図書館でもサービスを開始しています。利用は学内者に限定されており、依頼から閲覧までの所要時間は、柏図書館が約１時間、総合図書館と駒場図書館が約１日となっています。

依頼から到着まで

申し込み
利用者は自分のデスクのパソコンで「○○という学術雑誌の△△号の××ページから××ページまでを閲覧したい」という旨を申し込み画面から図書館に依頼します。

→

図書館の動き

受付
閲覧依頼を図書館が受付。受付時間は9:00〜17:00となっています。

↓

出庫指示

↓

自動化書庫
係員の指示により、自動化書庫（次ページ参照）がスピーディに目的の文献を探し出します。

↓

出納ステーション
探し出された文献は、コンテナごとベルトコンベアーで運ばれてきます。

←

スキャン＆pdf化
依頼文献を専用マシンでpdfファイル化します。

↑

画像転送

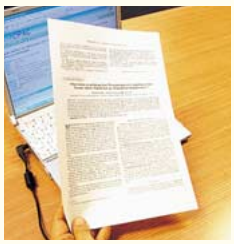
↑

e-DDSサーバー
文献画像ファイル

←

待つことしばらく……

←



閲覧＆印刷
「閲覧依頼された文献がe-DDSサーバーにアップされました」との電子メールが図書館から到着。利用者は学内からe-DDSサーバーにアクセスし、閲覧します。１部のみ、印刷することも可能です。

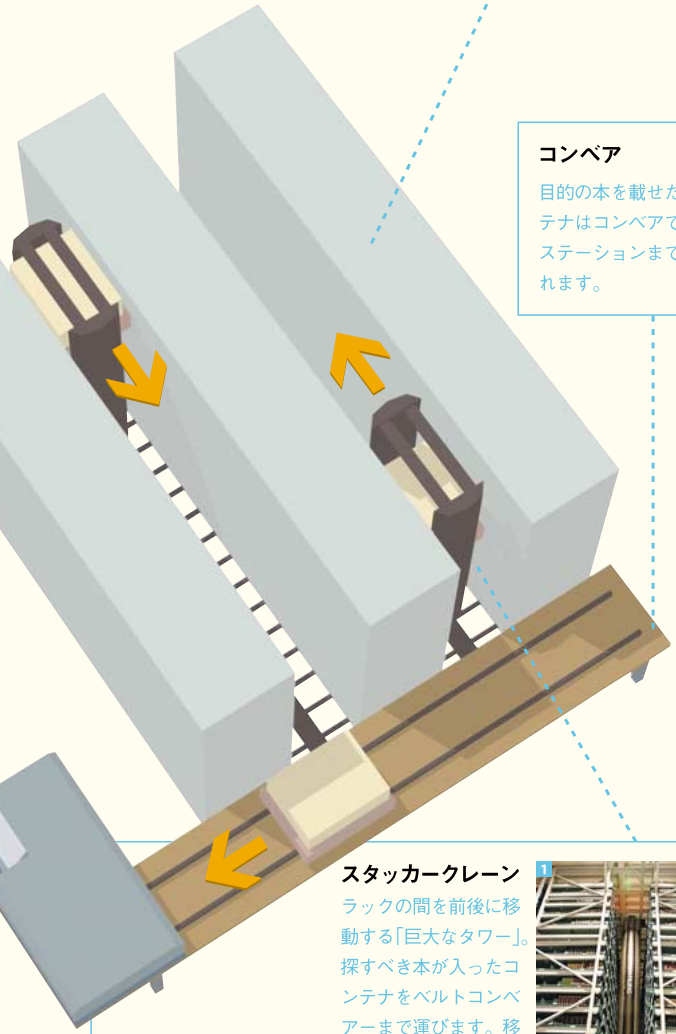
*e-DDSサービスとは、「文献画像伝送システム」 Electronic Document Delivery System & Servicesのことです。

自動化書庫ってなに?

欲しい本を書庫から出納カウンターまで自動で素早く届けてくれる最新の出納システムです。本の出庫指示から到着まで約2分、利用者を待たせません。柏図書館では自然科学系学術雑誌のバックナンバーを収容しています。

ラック

一見、巨大な倉庫に見えますが、これは言わば「本の倉庫」。本を納めたコンテナがこの大きなラックいっぱいに収められています。



コンベア

目的の本を載せたコンテナはコンベアで出納ステーションまで運ばれます。

スタッカークレーン

ラックの間を前後に移動する「巨大なタワー」。探すべき本が入ったコンテナをベルトコンベアーまで運びます。移動速度が速いので、目の前で見ているとかなりの迫力!

1. 目的のコンテナがスタッカークレーンに移されます。
2. かなりの速度で移動してくるスタッカークレーン。迫力です!
3. コンベアの前で停止。コンテナはコンベアに移されます。